法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

父なる祖国、母なる言語 : 祖国と母をめぐるハイネの詩について

内田, 俊一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
108
(開始ページ / Start Page)
45
(終了ページ / End Page)
64
(発行年 / Year)
1999-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004809

Hosei University Repository

父なる祖国、母なる言語

——祖国と母をめぐるハイネの詩について——

内田俊一

私の罪は思想ではなかった、それはむしろ書き方、文体だったのだ。
ハインリヒ・ハイネ『流謫の神々』の削除された一節

昔は私にも美しい祖国があった
そこには樫の木が
高くそびえ　すみれが優しくうなずいていた
夢にすぎなかったけれども

祖国は私にドイツ語で口づけし　ドイツ語で言った
(信じられないほどに
すばらしい響きだった)「お前を愛してる」と
夢にすぎなかったけれども[1]

Hosei University Repository

ハイネは、その手法を民謡に求めたと言われている。この簡潔な詩は、その顕著な実例のひとつである。五歳の子供でも、あるいはドイツ語を外国語として学び始めて間もない者でも、理解できる単語だけで、それは組み立てられている。これほど単純で素朴な詩は、およそほかに存在しないと言ってもよい。だが同時にこの詩は、ハイネの手法が単に民謡の語法をなぞるだけのものではないことも、遺憾なく示している。第二連の括弧による挿入は、その後に続くクライマックス（「お前を愛してる（イッヒ・リーベ・ディッヒ）」）を、堰き止めることによって強めようとする、巧妙な仕掛けである。それは、本来的に（文字ではなく）音によって構成される民謡の語法に、それとは相容れぬ要素を混入することによって、民謡風の単調なリズムを突き崩すだけではない。過去の情景の描写を分断して、現在の話者の哀切な、憧れと痛みに満ちた感慨を挿入することによって、それは視点を二重化し屈折させる。さらにこの第二連では、祖国は主人公に愛を語り、口づけする者として擬人化されている。だがそれだけではなく、その隠喩の上に、さらにもうひとつ別の隠喩が重ねられる。主人公に対する祖国の口づけは、ドイツ語でなされるのである。「祖国 Vaterland」という主語と「口づけする küssen」という動詞、さらに「ドイツ語で auf deutsch」という状況語、およそ考えられる限り最も単純で基本的な三つの語彙を、さりげなく結びつけるこの撞着した表現によって、この一見単純な、語数の少なさによって際立つ短かい詩は、ある本質的な状況を射貫き、複雑な問題連関を切り開いている。

『新詩集』（一八四四年）の「異郷にて」の部に、その第三篇として収められたこの詩が、初めて発表されたのは一八三四年のことだった。従ってハイネのパリ亡命後の初期に属する。これは、亡命者の歌う望郷の詩である。もちろん、この皮肉な亡命者の目に映る祖国は、ひたすら光明に満ちているわけではない。樫の木やすみれの花は、祖国ドイツを象徴するものとして、ハイネがしばしば利用する形象である。同じ『新詩集』に収められた「一八三九年に」の詩では、これらの形象は阿呆町（シルダ）と結びつけられている。

Hosei University Repository

詩人には故郷が幸せだった
阿呆町のかけがえのない樫の森が
そこで私は優しい詩を織り上げた
すみれの匂いや月の光から[2]

対象に対する共感と皮肉の交錯は、ハイネの詩の特徴的な構造だが、それはここにも表われている。失なわれた故郷への共感はまぎれもないが、しかしそれは阿呆町として、皮肉な視線にも晒されるのである。だとすれば、亡命者の追憶の中にある祖国は、けっして「美しい」だけのものではなかったはずだ。その美しさは「夢」にすぎなかったのか。それとも、それが美しかったのは、「夢」だったからなのか。故郷への詩人の憧れが、特に哀切感に彩られているのには、理由がある。彼は二重に故郷を喪失しているのだから。亡命者として。そしてそれ以前に、またそれ以上に、ユダヤ人として。

望郷の詩であると同時に、これは恋の詩でもある。夢にすぎなかったがゆえに、美しさの中に想起される対象への愛が歌われている。その対象とは祖国である。祖国は「お前を愛してる」と言った。だが不実な恋人の言葉は偽りだった。「夢にすぎなかった」。ハイネの、特に『歌の本』（一八二七年）に見られるような恋愛詩群（と言うよりも失恋詩群）と、彼の政治的著作との間を結ぶ脈絡が、この詩におけるほど明確に語られている個所は、おそらくほかにないだろう。ハイネの失恋の詩は、同化ユダヤ人である作者の政治的失望――故国のユダヤ人解放政策の欺瞞性に対する幻滅――によって裏打ちされている。すでに『歌の本』中の「抒情挿曲」において、「大きな苦しみから／私が作るのは小さな歌[3]」と歌ったハイネが、その連関に無自覚だったとは思えない。

だがこれが恋の詩だとして、ここに登場する「私」は、いったい男なのだろうか、女なのだろうか。もちろん作者ハイネは男性であるからして、通常この「私」は男と想定されている。しかし問題はそれほど自明のこととは思えない。祖国は父なる国（Vaterland）であり、そうである以上、当然男性であるだろう。とすれば、その恋愛の

Hosei University Repository

対象たる「私」は、むしろ女性として想定すべきではないだろうか。祖国という男性から口づけを受け、「お前を愛してる」と囁やかれるといった状況は、むしろ女性を思わせるものがある。ハイネの初期恋愛詩においては、詩の話者は当然のこととして男性と受けとられており、作者自身も、その前提のもとに書いているのは間違いない。しかし恋愛相手に裏切られ、心に深い傷を負う恋愛詩中の「私」たちは、むしろ女性として想定したほうが、得心のいく場合がしばしば存在する。そこでは、男と女の役割が転倒させられているのではないだろうか。それらはむしろ、男に裏切られた女の言葉として読まれたほうが、説得力を持つのではないだろうか。ハイネの恋愛詩（失恋詩）の最高傑作は、そうした「不自然」な初期の作品ではなく、あわれなユダヤの老婆の身に仮託して、遠い昔に自分を裏切った恋人への呪詛を歌う晩年の詩「思い出してはならぬ Nicht gedacht soll seiner werden!」ではないかと、私には思えてならない。

男と女の関係は社会的関係であり、恋愛は社会的行為である。男の女の役割分担は、従って恋愛における役割分担もまた、けっして自然的なものではない。近代社会にあって女性には、弱さ、受動性、貞節等々の属性が割り振られる。これらは、女性存在自体に備わる自然的属性ではなく、社会的規定である。女性性は「『理解されてこそ』存在し、解釈の先行性において支配されている。」[1] もちろん、女性性の対極にある強さ、能動性、裏切り等々といった男性性の要素についても、同じことが言えるだろう。そうであるならば、詩の作者の自然的性と、作中の話者たる「私」の性のずれ、ないし不一致は、不思議なことではない。作中の「私」は、弱さ、受動性、貞節といった女性的属性を帯び、一方恋愛対象たる祖国は、強さ、能動性、裏切りといった男性的要素に彩られている。これをもし、倒錯と呼びたいならば、そう呼ぶことも可能だろう。ハイネはたぶん、自らの心中に深く秘めた倒錯性を、暴力的に抑圧していた。同性愛者である詩人プラーテンに対する、ハイネの有名な、あるいは悪名高い攻撃は、おそらくそのようなトラウマから発していた。

だがしかし、この「倒錯」はどこから生じていたのだろうか。社会的に理解された女性性の諸要素は、そっくりそのまま、ドイツ社会に同化しようとするユダヤ人の――社会的に理解された――諸属性に符合する。自らの独自

Hosei University Repository

性の主張を捨て、ドイツ社会に受動的に身を任せる同化ユダヤ人は、たとえ自然的性が男性であったとしても、社会的役割から見れば女性性を帯びていた。ある意味でユダヤ人は、男としてのドイツ社会に対する女だった。このことは、ユダヤ人の場合、自然的性が女性であるほうが、ドイツ社会に受入れられやすいということも意味していた。事実ラーエル・レヴィン（ファルンハーゲン）、ヘンリエッテ・ヘルツ、ドロテーア・メンデルスゾーン（シュレーゲル）といったサロンの女主人たちによって代表される、同化の初期段階においては、女性こそが動きを担う立役者だった。「ユダヤ人の場合……女のほうが男よりも百パーセント都合がよい」（フリードリヒ・ゲンツ）[5]のである。だが彼女たちの子供の世代であるハイネは、そのような社会的役割分担を拒否しようとする。自らを男性として定立し、ドイツ社会を女性として表象するハイネの恋愛詩は、そして彼の男性性の過剰な誇示は、その役割を否定しようとする必死の身振りである。そして同時代から現代に至るまで連綿と続く、ハイネに対するドイツ社会の側からの拒否と嫌悪――それは、他のいかなるユダヤ知識人に対しても見られないほどの強度を示しているが――は、その転倒を許し難いものと見なす憤激以外の何ものでもない。それはむしろ、政治的なものであるよりは、性的嫌悪に近い。

ハイネは、貞節な愛を裏切られるという女性的経験を、無理やり力ずくで男性的鋳型に押し込み、その恋愛詩を作り出した。それらの詩に作為性が感じられるとすれば、その理由はおそらくここにある。彼の詩に女々しさが感じられるとしても、それは当然と言わなければならない。彼の恋愛詩においては、愛の形が奇妙な変形を蒙っている。ハイネにとって「愛」とは、そもそも何だったのか。それを最も赤裸々な形で示しているのは、母に捧げた次の詩かもしれない。彼の最も初期の作品に属する（一八二一年初頭に作られたと推定されている）この詩は、のちに『歌の本』に収められた。以下に引くのは、「V・ゲルデルン家より嫁ぎし　わが母B・ハイネに」と題され、二篇のソネットから構成された詩の後半部分である。

Hosei University Repository

馬鹿な妄想から私は去った　あなたのもとを
世界の果てまで行きたくて
愛を見つけられるか知りたくて
愛に満ちて愛を抱くために

あらゆる路地に　私は愛を探した
戸口という戸口の前に手を差し伸ばし
愛のほどこしを乞い求めた――
だが嘲りとともに返ってきたのは　ただ冷たい憎しみ

いつも私はさまよった　愛を求めて　いつも
愛を　だがいつも愛は見つからず
病んで暗く家に帰った

あなたはそこで私を迎えてくれた
そしてああ　その時あなたの目に浮かんでいたのは
それこそ　長く探し求めた優しい愛だった[6]

「愛」という語がこれほど頻出する詩を、私はほかに知らない。それが彼の恋愛詩でなく、このような詩の中で起きていることは、示唆的と言えるかもしれない。この「愛」の連呼は、ほとんど悲鳴のように聞こえる。

この詩は、母に対する拒否と愛着という、緊張に満ちた二重の関係から成立している。もちろんその気になれ

Hosei University Repository

ば、ここにハイネの母親コンプレクスを発見して、精神分析的解釈を施すことは可能である。だが詩というものは、幾つもの意味の層から成り立っており、それらの層の全てが呼応して、全体としての詩を形作っている。たしかに一つの意味の層では、そのような解釈を誘うものが読み取れることは否定できないが、今ここでそれを問題にしようとは思わない。むしろ私の興味を引くのは、もうひとつ別の層における意味である。ハイネの教育の方針を決めたのは、ユダヤ人としては名門と呼べる、デュッセルドルフのファン・ゲルデルン家に生まれた母親だった。彼女はハイネをキリスト教系の学校に通わせ、将来は弁護士ないし銀行家にしたいと希望していた。しかし彼はそのような「正業」をめざす道からはずれ、「馬鹿な妄想から」詩人への道を踏み出してしまった。（前半のソネットでは「あなたの心を悲しませる数々の行ないを　私は犯した」と歌われている。）この詩が書かれた直接のきっかけは、その文学の道で自分がいかに進歩し、いかに見事なソネットを作れるまでに成長したかを、母に示すと同時に、母の期待を裏切ってしまったことへの謝罪を表明することにあった。この二重性は、詩の内容をなす、母に対する拒否と愛着の二重性に対応している。

母によって示されたドイツ社会への同化の道を、彼は拒否した。彼が選んだのは、社会のアウトサイダーとしての詩人への道だった。しかしその道は、ドイツ語で書く、「ドイツの詩人」への道として、またもうひとつ別の同化への道にほかならなかった。そしてそれは、ある意味ではユダヤ人にとって伝統的な、ユダヤ人にも許容された銀行家への道などと比べれば、はるかに完全な同化をめざす道、受け容れられることの最も困難な道ですらあった。同化から逃れた者が、また再び同化へと打ち返される。母から逃れてたどり始められた道は、このようにして――詩の中の「私」の軌跡と一致して――再び母へと戻って行くのである。もちろんこの詩を書いた当時のハイネは、まだ詩人としてのキャリアを歩み始めたばかりであって、ユダヤ人ハイネから、「ドイツの詩人」の桂冠を剝ぎ取ろうとする後年のキャンペーンは、まだ遠い未来の事である。しかし鋭敏で傷つきやすい彼の耳には、すでにその「嘲り」と「憎しみ」の大合唱が聞こえていたに違いない。「私はドイツの詩人です／ドイツの国では有名な／優れた詩人の名を呼べば／私の名前も呼ばれます」[7]（「帰郷」13）という後年のハイネの強烈な自己主張は、その

Hosei University Repository

主張を拒む圧倒的な力の存在を、背景に置いて読まれなければならない。

ハイネが「あらゆる路地に探し」求め、「戸口という戸口の前に手を差し伸ばし」て、まるで乞食がほどこしを求めるように乞い求めたもの、つまり彼が探し求めた「愛」とは、ドイツ人としての、さらに言えば「ドイツの詩人」としての承認だっただろう。だがそれが、たとえばユダヤ人銀行家がドイツ人として承認されることなどよりも、はるかに困難だったのは、言葉、つまりドイツ語という言語こそが、形成されつつあるドイツという国民国家（ネーション）の要だったからにほかなるまい。政治的に統一された国民国家が未だに存在しないとはいえ、いやむしろそうであればこそ、暖かさ――愛――を育む共通の紐帯としてのドイツ語には、大きな意味が負わされることになった。

ここで私は、この詩を構成するもうひとつの意味層に、どうしても触れずにはいられない。というのも、ここで母を歌っているのは、詩人、つまりドイツ語によって生み落とされながら、ドイツ語に新たな生命を吹き込む者、だからである。ここに歌われている母は、ユダヤの名門ゲルデルン家の出身で、家ではイディッシュ語を喋りつつ、子供たちにはドイツ社会への同化の道を指示し、時々怪しげなドイツ語を綴ったユダヤの母、ベティー・ハイネなのだろうか。たしかにひとつの意味層では、そうである。しかしもうひとつの意味層では、この母、つまりハイネがそこから逃亡しつつ再びそこに打ち返され、「長く探し求めた優しい愛」を彼に与え、拒否と愛着という、緊張に満ちた二重の関係の対象であるこの母とは、ドイツ語という母語（Muttersprache）にほかならなかった。

ドイツ語に対するハイネの関係は、まさに拒否と愛着という二重の感情に引き裂かれていた。一八二二年四月十四日に友人C・ゼーテに宛てた有名な書簡には、こうある。

> ドイツ的なものはすべて厭わしい。そして君は残念ながらドイツ人だ。あらゆるドイツ的なものは、私には催吐散のような作用を与える。ドイツ語は私の耳を引き裂く。時々自分の詩でも、それがドイツ語で書かれているのを見ると、吐き気を感じるほどだ。この手紙を書くのさえいやなのだ。ドイツ語の文字が私の神経にひどくさわるのだ。[8]

Hosei University Repository

そして彼はその後を、フランス語で続ける。自分は東洋に移住して、アラビアで羊飼いの生活を送るつもりだと。ドイツ人の友人に対しては、彼はドイツ語への拒否を表明するのである。だがもちろん、この逃避が不可能であり、自分でも本当にそれを望んでいるわけではないことを、彼は十分に承知している。なぜなら彼は、ユダヤ人の友人に対しては、また別の表情を覗かせるからである。二年後にルードルフ・クリスチアーニに宛てた書簡には、こう書かれている。

私は自分が、最もドイツ的な獣(けもの)の一匹であることを承知している。私にとってドイツ語は、魚にとっての水のようなものであって、もし私が――水の比喩を続けるなら――ドイツ人気質の水から跳び出してしまえば、――魚の比喩を続けるなら――干上がって丸干しになってしまうということを、十分すぎるほど承知しているのだ。それどころか私は、根本的にはドイツ語を、世界のあらゆるもの以上に愛してさえいる。……私の胸は、ドイツ的感情の記録庫なのだ。(9)

ドイツ語によって生み落とされ、ドイツ語を、それが歴史の中で帯びてきた様々な感情もろともに、我が身に引き受けた詩人は、「ドイツ的感情の記録庫」となる。正確な比喩である。

ドイツ人の友人に対しては、ドイツ語への嫌悪を表明して、自らのドイツ性を徹底的に否定し、ユダヤ人の友人に対しては、ドイツ語との切っても切れない親縁性を、いやドイツ語への愛情すらをも表明し、自らのユダヤ性を否定するドイツ・ユダヤ人ハイネ。いったい彼のアイデンティティは、どこにあるのだろうか。いやむしろ彼はこの先も、なんらかの偽りのアイデンティティを案出することによって、この事態を糊塗することなく、その分裂をとことんまで押し進めていくだろう。それがつまりは、ハイネという人物の生きる意味であり、歴史によって負わされた使命だったのかもしれない。だが母に捧げる詩が書かれた時点では、彼はまだそこまで腹を据えてはいない。そこでは、母から逃亡した彼が、再び母の優しい愛に戻って行く。彼にとって安住できる場所が、安住できる

Hosei University Repository

アイデンティティが、そこに想定されている。最後の逃げ場が、そこに用意されている。問題の脈絡をはっきりさせるために、この詩の少し前に書かれた文学評論「ロマン主義」（一八二〇年）の一節を引用することにしたい。これは、ハイネの現存する最初の散文作品である。

……それゆえ少なくとも私は、それによって益するところがあるという見込みがなければ、つまり単に冗談半分などでは、ドイツの言葉の発展が、ほとんどもっぱらそれに依存しているような事柄について、語りたいとは思わない。なぜなら上着を叩けば、その上着に納まっている人物も打撃を受ける以上、ドイツ語の詩的形式を揶揄すれば、ドイツ語そのものを傷つけるようなことも、少なからず紛れ込んでしまうからである。そしてこの言葉こそまさに私たちの最も神聖な富であり、いかなる狡猾な隣人も動かすことができないドイツの境界石であり、いかなる外国の権力者も沈黙させることができない自由の覚醒者であり、祖国のための闘いにおける軍旗であり、愚かさと悪意によって祖国を拒まれた者には、祖国そのものなのである。[10]

これは、ロマン主義を擁護するために書かれた文章である。彼がそこでロマン主義を代表する者として名を引くのは、ゲーテと、ボン大学における自らの師A・W・シュレーゲルの二人であり、さらに彼はこの文学的潮流を、キリスト教的な愛と結びつけて論じている。ここでは彼はまだ、自らの文学的出発点であるドイツ・ロマン派の語彙圏の中に、どっぷり漬かり込んでいる。彼がここで、「揶揄」することが許されない「ドイツ語の詩的形式」（ドイツ語そのものに本来的に備わった詩的形式、という意味だろうか？）と呼ぶものは――「揶揄」に満ちた後年のハイネの文学的営為から考えれば、奇妙な思いに捕えられるが――、ドイツ・ロマン派の詩的形式を指しているのだろう。ユダヤの伝統から隔絶し、いわばまっ白な白紙の状態でドイツ社会の中に置かれたハイネ、「教養ある無知者」[11]としてのハイネにとっては、目の前に開けたドイツ・ロマン派の世界が、まさにドイツそのものを体現するように見えた。ドイツ語という母語こそが、「まさに私たち（ドイツ人）の最も神聖な富であり、いかなる狡猾な

Hosei University Repository

隣人も動かすことのできないドイツの境界石であり、いかなる外国の権力者も沈黙させることができない自由の覚醒者であり、祖国のための闘いにおける軍旗」であるという確認は、まさにドイツ・ロマン派のイデオロギーを、あるいは成立しつつあるドイツ・ナショナリズムの基盤となる認識を、代弁していると言ってよいだろう。ハイネのここでの議論に直接の影響を与えたのは、あるいはフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』（一八〇八年）だったかもしれない。ナポレオンの率いるフランス軍の支配下に置かれたドイツで、未だ成立せざる「ドイツ国民」の団結と統一を訴えたこの書物の中では、「内的国境」の徴表としての「言語」について語られていた。[12] だがユダヤ人ハイネは、自分を「ドイツ人」と見なして定式化した、ここまでの命題に自ら満足できず、どうしても最後の言葉を――そしてこれこそが、借り物ではない、本当に彼自身の言葉だが――付け加えずにはいられない。ドイツ語という母語こそが、「愚かさと悪意によって祖国を拒まれた者には、祖国そのもの」なのだと。

「愛」を求めながら、「嘲り」と「憎しみ」によってそれを拒絶された詩人が、最後にたどりつく「愛」としての母。そして「祖国」との一体化を求めながら、「愚かさと悪意によって祖国を拒まれた者」が、最後に依拠する「祖国」としての母語。ほぼ時を同じくして書かれたソネットと評論文は、こうした弁証法において、そっくり同じ構造を持っている。だが問題は、残された最後の逃避場所としての母の愛が、あるいは残された最後の立脚点としての母語が、絶対確実な、安住を許すものなのかどうかということである。換言すれば、ドイツ・ロマン派的ないしドイツ・ナショナリズム的発想から――いかにも彼らしい力ずくの反転を通じてであるとはいえ――絞り出された立場が、ユダヤ人ハイネの確実な立脚点たりうるか、ということでもあるだろう。

ここで再び、冒頭に引いた「祖国」の詩に戻っていくことにしよう。そこでは祖国と母語が、切り離すことのできない一体のものとして登場していた。つまりそこでは、擬人化された「祖国」が「私」に、ドイツ語で「お前を愛してる」と囁くばかりでなく、ドイツ語で「口づけ」するのである。先に私はこの比喩を「撞着」という言葉で形容した。しかしそれは、驚くほどに正確な表現である。「口づけ」という行為が、口唇の単なる物理的接触に

Hosei University Repository

よって成立するのではなく、その「口づけ」という言葉が担うあらゆる感情とともに、初めて成立するものだという意味においても。また祖国による国民の抱擁ないし包摂が、言葉を通じて、つまり母語を通じて行なわれるという意味においても。さらにまた、言語器官である口を通じての祖国と国民とのこの結びつきが、甘く優しい感情を内包しているという意味においても。ドイツ語による祖国の口づけと囁きは、「信じられないほどに／すばらしい響きだった」のである。

しかしそれは、夢にすぎなかった。いったい何が、「夢にすぎなかった」のだろうか。「祖国」が夢にすぎなかったのか。ハイネは亡命先のパリで、この詩を書いている。だから彼にとっての祖国は、すでに本来の意味の祖国ではなかったが、しかしそれが現実に存在していることは、厳然たる事実であって、夢などではなかった。夢にすぎなかったとすれば、それは彼を抱擁してくれる祖国の優しさ、父なる祖国（Vaterland）の父性が、だっただろう。ハイネは、自分に対してそのように父性愛を拒む祖国を、「継父国 Stiefvaterland」[13]と呼んだ。では、かつて彼が「愚かさと悪意によって祖国を拒まれた者にとっての祖国」と呼んだドイツ語、彼にとっての母語は、どうだっただろうか。たしかに彼は、パリにおいてもドイツ語で書いていた。それは、祖国が現に存在し続けているのと、同じことだった。だが、かつて祖国が囁いた「お前を愛してる」という言葉の「信じられないほど」の「すばらしい響き」も、つまり母語の優しさも、実は永久に失なわれてしまったのではないのだろうか。母なる言語の母性もまた、夢にすぎなかったのではないだろうか。彼がここで悲しみとともに追憶しているのは、彼が捨てて来た父なる祖国であるよりは、むしろかつて彼を優しく包み込んでくれた、母なる言語の暖かさだったのではないだろうか。過去の言葉の響きのすばらしさを、今では彼はもう「信じられない」のである。「継母語 Stiefmutter-sprache」という造語こそ、彼は使いはしなかったけれども。

かつて彼は、父の愛の欠如を、母の愛によって補填しようとした。父なる祖国の愛を、母なる言語の愛に置き換えようとした。それが、同化と排除の弁証法によって追いつめられたハイネの、ぎりぎりの選択だった。しかしそれは錯覚にすぎなかった。父性と母性の関係は、もつれ合って一体をなしている。祖国の愛は、母語を介在するこ

Hosei University Repository

とによって、初めて国民を抱きとめ、逆に母語の暖かさは、祖国の存在を前提している。この詩を書いているハイネは、もはや父なる祖国の中にいないだけでなく、母なる言語の中にもいない。それは、祖国ドイツを離れて、フランス語の中に暮しているという外的事実によってではなく、母語との内的関係の変化によってである。彼はもはや、母なる言語の愛に包まれてはいない。母語の優しさは、すでに過去のものとして、追憶の対象となっている。ドイツ語によって生み落とされた詩人は、悲しみとともにその母の愛を離れ、新たな愛を育んで、新たな生命を宿す。そのことによって、彼は再び母なるドイツ語に、生命力を贈り返すのである。どのようにしてか。たとえばそれは、政治と愛と言語という三つの地平を、瞬時に切り結ぶ暴力的な語法によって。最も離れた場所に最も近しいものを発見し、最も緊密に結ばれた関係に、最も無意味な空洞を発見する、破壊的な認識によって。固定した意味体系の中に安住する者どもを脅かす、壊滅的な言葉の起爆力によって、である。そのことによってドイツ語は、硬化した意味体系の支配を脱し、新たな生命力を獲得するだろう。

ハイネは一八四三年、つまり冒頭の詩から九年後、亡命から十二年後に、再び憧れと痛みに満ちて、祖国ドイツに想いを馳せる。「夜の想い」と題されたその詩は、一八四四年に出版された『新詩集』の巻末に置かれ、いわばそれを締め括る役割を果たすことになった。祖国を歌うこの詩には、だが、それと分かち難く結ばれながら、一方ではそれと対置されるものとして、そこに住む母が登場する。再びこれは、政治詩にして愛の詩である。元来、病気の母を気遣う（政治的要素を含まない）望郷の詩の構想が最初にあり、そこから発展して、この詩が成立したことが知られており、この作品に先行する、母を歌う詩の試作も残されている。だがもちろん、この詩の政治的要素と、母に対する愛を歌う抒情的要素とは、ただ単に接ぎ木されただけのものではないし、ここに登場する「母」もまた――これまでの議論の通り――、ただ現実の病んだ母、ベティー・ハイネだけを意味しているのではない。

Hosei University Repository

夜の想い

夜ドイツを想えば
わが眠りは奪われる
もはや目を閉じるもかなわず
熱い涙が流れる

歳月は来て　また去る
母を見ずして
十二年が過ぎた
膨らむのは　憧れと恋しさ

憧れと恋しさは膨らむ
私を捕えたのは　老女の魔法
いつも思うのは　あの年老いた女
神よ　老女を守りたまえ

老女も私を恋い慕う
手紙を見れば　よくわかる
どんなに老女の手が震え
心が深く動いたか

Hosei University Repository

母が脳裏を離れない
十二年もの歳月が流れ
十二年もの歳月が過ぎた
母を胸に抱けなくなってから

ドイツの国は永遠だ
骨の髄からじょうぶな国だ
柩とともに　菩提樹とともに
いつでもまた会える

憧れはすまい　ドイツになぞ
母さえそこにいなければ
父なる祖国は亡びはせぬ
だが老いた女は死ぬやもしれぬ

私がドイツを去ってから
次々ひとは墓に沈んだ
愛した人々を　一人一人と数えれば
心はあやうく血を流す

数えねばならぬ　その数とともに

Hosei University Repository

わが苦痛は高まり
屍はわが胸に跳り込む
だが　ああ　それも姿を消し

窓を貫き射し込むものは
フランスの地の陽気な陽ざし
朝のごとく美しきわが妻が
微笑でドイツの憂いを追い払う[14]

一九三三年以前のドイツにおいて、最も人口に膾炙したハイネの詩句が、「なじかは知らねど心わびて」という「ローレライ」の冒頭の一節だったとすれば、それ以後の、ドイツから亡命した人々の間で、だがまた一九四五年以後の分裂したドイツにおいても、それとは別の脈絡で、最も引用され、最も愛好されたのが、この詩の冒頭の二行「夜ドイツを想えば／わが眠りは奪われる」だったと言ってよいだろう。だが一九四五年以前の亡命者たちはともかくとして、そもそも戦後のドイツに、この詩句を引用する権利があるのかどうかは疑問である。むしろハイネならば、統一以後のドイツの現状に対して、「ドイツの国は永遠だ／骨の髄からじょうぶな国だ」（「骨の髄からじょうぶな kerngesund」という形容詞は、あるいは「殺しても死なない」くらいに訳したほうが良いかもしれない）という皮肉を捧げたくなっただろう。

冒頭に引いた一八三四年の詩では、父なる祖国と母なる言語とは、分かち難く絡み合い、一体を成すものとして現われていた。しかしこの詩では、母はたしかにドイツの内にいて、そこから動かすことはできないのだが、一方では、ドイツという国との対比において現われてくる。「私」がドイツを想うのは、母がそこにいるからにすぎない。「母さえそこにいなければ」、彼はドイツになぞ憧れはしないのである。ドイツという「継父国」とは、彼は完

Hosei University Repository

全に縁を断った。ただハイネにとって気がかりなのは、その男のもとに残された「年老いた母」である。一瞬たりともこの母のことが、彼の脳裏を離れることはない。なぜなら詩人である彼は、その母語によって生み落とされたのだから。そして今でも、その母語を綴っているのだから。

一八二一年の段階で、母語を無理やり祖国から分離し、そこに最後の希望を託したハイネは、亡命後の一八三四年にはその錯誤を悟り、母語と祖国とのもつれ合った関係を認識した。だがさらにその九年後には、再び祖国と母語を対置し、母語との新たな関係を創出しようとする。それは、自分と祖国との関係を、あるいはそもそも祖国なるものの孕む関係性を、変化させるためでもある。ここでは、母は単に愛惜の対象であるばかりではなく、皮肉な視線にも晒されている。もちろん母は、今でも彼に愛されてはいる。しかし母を対象化するだけの余裕を、彼は獲得したのである。母は「年老いた女」と呼ばれる。そしてこの老女――ドイツ「民族」と同じだけ古いと想定されている母語――が、彼に「魔法をかけ behexen」た。その結果、彼はいつでも母のことを思っているのである。ここで母は、なんと魔女（Hexe）として暗示されているのだ。たしかに、閉鎖された意味体系の中に国民を囲い込み、そこに安住を許された者たちに居心地のよさを、愛を、保証する母語の魔力は、魔女のそれに似ているかもしれない。母の愛は、それが注がれる者たちに、暖かさを与える。だがそれはまた、そこに安住する者たちを弛緩させ、新たな生命を育む力を奪い取る。だがこの母語の魔力を、こうして形象化することができたハイネは、すでにその呪縛を脱しているのである。

もちろん彼は、今でも母を愛している。母語がなければ、詩人としての彼の存在もなかったのだから。だがその母は、彼の手の届かぬ「向こう側」にいて、彼の胸に抱くこともできない。祖国から排除された彼の愛は、もう二度と母に届くことはないのだろうか。彼の愛は、永遠の片思いに終わるのだろうか。だがその時、彼は気づくのである。自分が母を愛し、必要としているだけではない。むしろ母こそが彼を恋い慕い、彼を必要としているのだと。時折届く祖国からの母語の便り、彼にも窺うことのできる母語の現状、その震えと深い心の動きから、彼には自分が必要とされていることが分かるのである。彼は以前のように、母の愛に包まれることを望むのではない。む

Hosei University Repository

しろ自分を必要としている母のために、新たな生命を送り届けたいと思う。彼の破壊的な言葉の生命力がなければ、「年老いた女」の硬化した意味体系は死に瀕するかもしれない。たしかに、「骨の髄からじょうぶな」祖国は、亡びはしない。そしてそれとともに、外見上は、母語も未来永劫存続するだろう。しかし彼のような存在を、意味体系に同化できない異物の存在を、排除しようとする限り、母語の内部は腐蝕に犯される。閉鎖され、硬化した意味体系は、いつか崩れ落ちるのである。彼はそれを防ぎたいと思う。しかし祖国から排除された彼には、それを防ぐ直接の手だてはない。彼が受け容れられなければ、異郷から発せられる彼の言葉が受け容れられなければ、母語は死ぬだろう。そうならないことを、彼は神に祈るしかない。

最後の三連には、母はもう登場しない。そこで語られるのは、死ぬかもしれない母ではなく、すでに死んだ人々についてである。ハイネが愛したそれらの人々も、彼自身と同様に、祖国の政治体制から排除され、閉鎖的な意味体系から締め出された人々だったのだろう。というのも彼らは、祖国で墓に埋葬されたにもかかわらず、未だに安らぎを見出すことができずにいるからである。もちろんハイネは、彼岸における救済なぞ信じない。しかし祖国には、彼らの安らぎはない。とすれば、彼らが安らぐことのできる場所は、いったいどこにあるのだろうか。その場所は、ただハイネの、死者の数を一人また一人と数えることしかできないハイネの、胸の内にしかないのである。死者たちの重みに圧倒されて、彼の胸は血を流しそうになる。死者の数を数えることに、何の意味があるのか。数えることができるのは、屍だけであって、かつてその内に宿っていた魂ではない。しかし彼は、数えることしかできない彼は、数えずにはいられない。その数とともに、屍たちが彼の胸を占領する。死者たちの魂を救う言葉を、未だ見出せずにいるハイネの胸は、苦痛のあまり張り裂けそうだ。その言葉さえ見つけ出せれば、つまり祖国に見捨てられて、無意味に死んだ者たちの魂を救う言葉さえ見つけ出せれば、死に瀕した母語を救うことも、可能なのかもしれないのだが。

ここでこの沈鬱な「夜の想い」は、窓から射し込むフランスの朝日と、妻のマティルデによって、突然遮られる。この最終連に至って初めて、ハイネの現在の居場所が明かされる。おそらくこの詩を書いたハイネの意識の表

Hosei University Repository

層では、「ドイツの憂い」を追い払うこのフランスの朝日は、王政復古期の反動的なドイツの政治体制を打ち破る、フランスの進歩的な政治思想として表象されていたのだろう。だがしかし、先行する九連の全てを満たす、夜の重苦しさを吹き払うものとしては、この最終連の希望は、あまりにも弱々しくはないだろうか。ハイネはもちろん意識していたに違いない。朝の次にはまた夜がやって来て、再び「夜の想い」が自分を苦しめるだろうということを。死に瀕したドイツの母の病状は変わらず、死者たちの幻影は、一時的に姿を消したにすぎない。だが、もしまだ何らかの希望が残されているのだとすれば、それは陽気なフランス女マティルデによって、もたらされるのかもしれない。母の呪縛を脱したハイネに、新たな生命を約束するものとして。また「年老いた母」を甦らせる、新たな母の生命力として。それとも、ハイネが「可愛い、太った子供 süßes, dickes Kind」[15]と呼んだマティルデ自身が、その新たな生命そのものなのだろうか。ハイネが異郷の地で、ドイツ語という母語との新たな関係を通して生み出した、「新しい詩」の言葉として。

注

(1) Heinrich Heine: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. Hg. v. M. Windfuhr. 16Bde.. Hamburg 1973-1997. (以下 DHA と略す) Bd. II, S. 73.

(2) DHA Bd. II, S. 81.

(3) DHA Bd. I, S. 167.

(4) 北川東子『ジンメル　生の形式』。講談社、一九九七年、一一八ページ。

(5) 引用は以下による。Hannah Arendt: Rahel Varnhagen. Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik. Neuausgabe. München 1981, S. 41.

(6) DHA Bd. I, S. 117f.

(7) DHA Bd. I, S. 123.

(8) Heinrich Heine: Säkularausgabe. Werke-Briefwechsel-Lebenszeugnisse. Hg. v. d. Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar [dann: Stiftung Weimarer Klassik] und dem Centre National de la Recherche Scientifique. Berlin und Paris 1970 ff. (以下HSAと略す) Bd. XX, S. 50.

Hosei University Repository

(9) HSA Bd. XX, S. 148.
(10) DHA Bd. X, S. 194.
(11) Arendt: a. a. O., S. 20.
(12) 鵜飼哲他『国民とは何か』。インスクリプト（河出書房新社）、一九九七年、特にエチエンヌ・バリバール「フィヒテと内的境界」二〇八ページ以下参照。
(13) DHA Bd. VI, S. 229.
(14) DHA Bd. II, S. 129f.
(15) DHA Bd. III, S. 114.